大豆技術情報 No.2

令和８年５月１２日

【発行者】新潟農業普及指導センター
新津庁舎:0250-24-9624、津川分室:0254-92-0965

単収 200kg 以上、２等級以上を目指して
耕転・播種・雑草対策！

○　出芽・苗立を高めるため砕土率 70%以上を確保！
○　「里のほほえみ」は裂皮防止のため６月上・中旬に播種
○　帰化アサガオ類は「つる」が出る前に体系防除を徹底

１　施肥

（１）土壌の酸度矯正　施用量の目安は、「ニュー大豆 800」20～30kg/10a

ほ場の土壌 pH を確認し、石灰質資材の施用により pH6.0～6.5 に酸度矯正する。

⇨ 施用量の目安は、「消石灰」100kg/10a または「炭カル」120kg/10a

（２）基肥施用

○10a 当たり施肥成分量は窒素 1.5～2.5kg、リン酸 6～8kg、加里 6～8kg を基準とする。

⇨ 施用量の目安は、「ニュー大豆 800」20～30kg/10a

○収量性の低い圃場では、全量基肥肥料の施用（窒素成分 7～8kg/10a）により、収量増加やしわ粒の減少等による品質向上が期待できる。

⇨ 施用量の目安は、「ワンタッチ大豆」40kg/10a

○安価な鶏ふんの基肥施用も化学肥料とほぼ同等の生育・収量が得られる。

２　耕転・播種

（１）耕転から播種まで連続して速やかに行い、過乾燥や過湿を回避する。
（２）耕深 13～15 ㎝と砕土率（２㎝ 以下の土塊重量割合）70%以上を確保する。

～砕土率 70%以上を確保するポイント～

ア　排水対策を早めに実施するなど、ほ場を十分に乾かす。（特に水田に隣接するほ場）
イ　低速走行とロータリー高回転で、丁寧に耕うんする。
※複数回耕うんする場合は、1回目を丁寧に行う（１回目が粗いと２回目以降は細かくなりにくい）。

（３）播種

○播種前に薬剤を用い丁寧に種子消毒する。(紫斑病･初期病害虫防除、鳥害防止)

○表１の目標苗立ち数に応じた播種密度を目安とする。また、「里のほほえみ」は裂皮防止のため６月上・中旬に播種する。

○播種の深さは３～４㎝程度とし、圃場が乾燥気味の場合はやや深めに、土壌水分が高い場合はやや浅めに播種する。

○畝立て播種は、畦の高さ 10cm を目安とし、播種後に畝間に滞水すると生育不良になりやすく、除草効果も低下するので畝間の溝を確実に周囲明渠に繋げる。

○「里のほほえみ」は粒が大きいので、播種機の目皿は大粒用を使用する。

表１　品種ごとの播種目安

品種名	播種時期	目標苗立ち数（本/㎡）	播種密度の目安		
			畔幅（㎝）	株間（㎝）	
				１粒播き	２粒播き
里のほほえみ	６/１～６/15	９～18	75	６～11	12～23
エンレイ（標準播）	５/20～６/10	９～10		10～11	21～23
エンレイ（晩播）	６/11～６/20	13～18		６～８	12～16

３　雑草防除

○雑草の種類に応じ、効果の高い除草剤を選ぶ。

○雑草が多い場合、耕起前に大豆に使用登録のある茎葉処理除草剤を散布し枯殺する。

○播種覆土後は、ただちに土壌処理除草剤を散布する。

～土壌処理除草剤の効果を高めるポイント～

ア　砕土率を高め（除草効果向上）、覆土の厚さは３cm 程度を確保する(薬害防止)。

イ　覆土後ただちに散布し、乾燥または過湿の状態での使用を避ける（除草効果向上）。

ウ　砂土では薬剤が土壌に吸着されず薬害を起こすので使用を避ける。

※帰化アサガオ類発生ほ場では、下記により効果の高い除草剤と中耕･培土を組み合わせた体系防除を実施

① 土壌処理除草剤（播種前混和）
② 土壌処理除草剤（播種後出芽前）
③ 茎葉処理除草剤１（大豆２葉期から開花前）
④ 中耕培土（開花期まで）
⑤ 茎葉処理除草剤２（株間処理：大豆５葉期以降雑草生育期）

帰化アサガオ類
マルバルコウ、マメアサガオ、アメリカアサガオ

【注意点】

・再生防止のために地際から刈り取るか抜き取る。

・種子の後熟防止のために刈り取った株を放置しない。
(5cm の高さで刈り取っても…刈り株の節からつるが伸び、１週間後には 1m 近くになります。)
(開花後に刈り取って放置すると、緑色の果実の中の未熟種子が後から熟して発芽力のある種子になります。)

・非選択性茎葉処理除草剤による防除は、上の方の葉や先端だけでなく株元まで十分かかるように散布する。

【その他】

・難防除雑草は、除草剤により除草効果がかなり異なるので、ほ場の雑草に合わせた除草剤を選択する。